

# 7 御前崎市のはってんに

# つくした人々

☆ どんなことをした人なのか、調べてみましょう。

みやもとじゅうきち  
1 宮本重吉 (池新田) ~砂とのたたかい~  
(1845~1936)



砂がまう砂丘

およそ100年前のお話です。

「みんなでやらにゃ。」

砂丘から飛んでくる砂から畑を守るためになんとかしようと、村の人々を集めたのが重吉です。費用や道具はすべて村の人が出し、32人で工事を始めました。砂丘に松やグミの枝をうえ「そだ」を立て、砂丘を固定しました。

工事を始めてからほぼ30年。砂がまってくる心配がなくなり、次々に開こんが進められていきました。

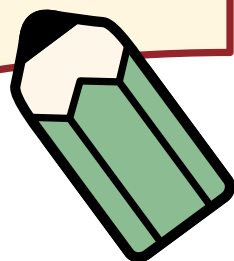
そして、今あるような、砂地に広がる畑ができあがったのです。



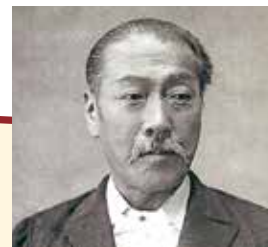
砂丘に立てられた「そだ」



砂丘の近くに広がる畑



まる お ぶんろく  
2 丸尾文六 (池新田) ~茶畑の開こん~  
(1832~1896)



およそ150年前のお話です。

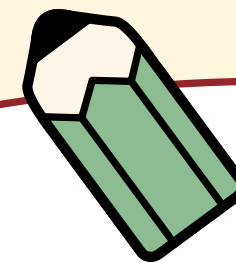
そのころ人々は、日でりや地しんのためにまずしい生活をしていました。文六は、生活を立て直す方法を教えたり、せつやくして貯金をすることをすすめたりして、村の人々を助けました。

文六は、なかでも牧之原の開こんに力を入れました。当時の静岡県の助けを受けて、大井川の川越人足であった33人の人たちを引きつれて、布引原(旧榛原町)へはいりました。今のように機械のない時代でしたので、木を切りたおして畑を作る作業はたいへんなことでした。

開こんから4年後、はじめてお茶をかり取ることができました。1879(明治12)年に横浜で開かれたお茶の大会で、文六が作ったお茶が第1位になりました。この受賞によって牧之原のお茶は、全国に知られるようになったのです。



牧之原の茶園



しみずりへい  
3 清水利平 (佐倉) ~みかんとお茶のさいばい~  
(1839~1916)



さいきんまで利平の家に残っていた、紀州から持ってきたみかんの木



清水利平のお茶が、大阪の博覧会で入賞した時の賞状

およそ100年前のお話です。

利平は、佐倉の人たちと共同でみかんの苗木を買い、夏みかんのさいばいを始めました。また、ネーブルが高く売れるということを知りつけ、紀州（今の和歌山県）より苗木を買って、村の人たちにさいばいすることをすすめました。

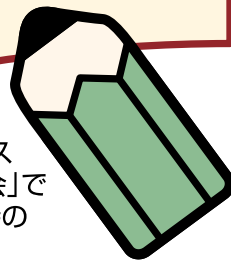
利平は、京都の宇治まで行き、お茶作りの勉強もしました。そのころのお茶の作業場が、今も利平の家に残っています。アメリカのシカゴで行なわれた「コロンブス世界博覧会」に佐倉のお茶を出し、丸尾文六とともに入賞しました。

また利平は、みかんの木がお茶によいえいきょうをあたえると知って、みかんとお茶をいっしょに植えることをすすめました。お茶のたいひを作るために、ぶたなどの家ちくを飼うこともしました。

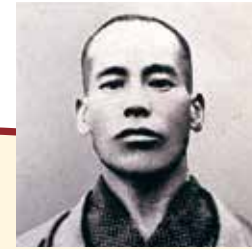
このように、利平は、先を見る目を持っていて、くふうしながら農業を進めました。



「コロンブス世界博覧会」で入賞した時のメダル



あつみきさく  
4 渥美喜作 (新野) ~便利な円巻機~  
(1873~1925)



新野にある渥美喜作の記ねん碑



円巻機

およそ100年前のお話です。

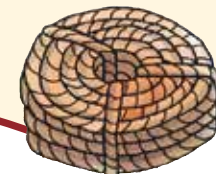
喜作の家は、新野のなわ問屋でしたが、世の中が不景気になり、なわが売れなくなりました。喜作は千葉のしょう油工場で、しょう油のたるをしぼるなわがたくさん必要なことを知りました。今まで作っていたなわは小口なわとよばれていましたが、たる用のなわはしょう油なわとよばれ、ねだんは2倍以上もしました。

しょう油なわが高く売れたので、農家の人たちはたくさん作るようになり、機械を使うようになりしました。できあがったなわのまき方は、女の人の髪型の島田まげににっていたので、「島田まき」と言われていました。このまき方は、たくさん作るのに手間がかかり、運ぶのにも不便でした。

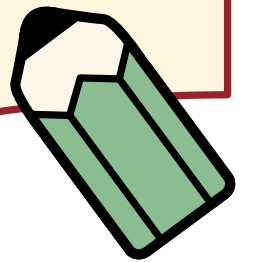
喜作は、いろいろくふうして「円巻機」を考え、作りしました。これは、じくを回してなわをまき取り、そのじくによってできたあなを使ってしぼるものです。まん中にあながあいたドーナッツ形になるので、「丸なわ」とよばれました。この機械でなわをまくと形がそろるので、運びやすく、使う時もからまないで、とても便利でした。



それまでのまき方「島田まき」



円巻機を使ってまいたなわ



5 おおさわごん う えもん  
大澤権右衛門 (御前崎) ~さつまいもを広める~  
(1694~1778)



御前崎地区のさつまいも畑

およそ250年前のお話です。

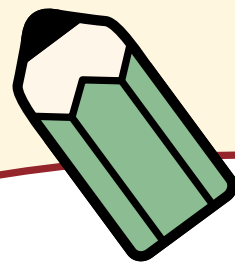
御前崎の海岸へ、あらしでつぶれてしまった薩摩藩(今の鹿児島県)の船が打ち上げられました。権右衛門たち村人は一生けんめい世話をし、24人の命を救いました。薩摩藩の役人は、お礼にお金を渡そうとしましたが、権右衛門は「海に生きる者が海で事故にあった人たちの命を助けるのは当たり前のことです。」と言って、お金を受け取りませんでした。

その後、権右衛門は役人に、こう、お願いしました。

「わたしたちの村の土では米を作ることができないので、食料が少なくてこまっています。船の人たちが食べていた黄金色のような物は、やせた海岸の土でも育つと聞きました。どうか、わたしたちの村のために分けてください。」

この「黄金色のような物」が、さつまいもです。権右衛門は、残っていた3個のさつまいもをもらい、育て方も教わりました。つるを分けてもらってさつまいもを育てる人が増え、村の大切な農作物になりました。

村の人々は権右衛門を「いもじいさん」とよび、いつまでも尊敬しつづけました。



6 くりばやししょうぞう  
栗林庄蔵 (白羽) ~いも切りぼしを始める~  
(1795~1871)



いも切りぼし  
乾燥だな



栗林庄蔵の碑

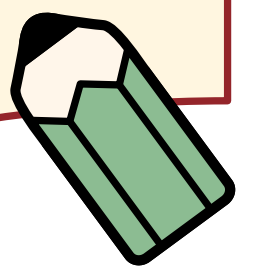
およそ200年前のお話です。

御前崎の土地に広まったさつまいもは、大きいわりに値段が安く、また、くさりやすく長い間の保存もできず、商品として遠くへ売り出すには向いていませんでした。さつまいもとお米をこうかんしようとして出かけても、なかなかかえてくれなかったそうです。山のようにつまれたさつまいもをながめながら、「これがくさらなければどんなに助かるだろう。」と、村人は悲しみました。

ある日庄蔵は、さつまいもを乾燥させることを思いつき、やってみることにしました。さつまいもをうすく切って乾燥させ「白切りぼし」をつくりました。うすでひいて粉にし、水でこねてむすと、おいしいおかしになりました。庄蔵はそれを、「お日あいのいも」と名づけ、たくさん売ることになりました。

また庄蔵は「煮切りぼし」も考えその商品にあったいもをさがし、畑で育てることを広めました。

このような庄蔵の努力が、今のいも切りぼしにつながっています。



しもむらかつじろう  
**7 下村勝次郎 (御前崎)** りょう ~漁をしやすくするために~  
 (1863~1941)



下村勝次郎



顕彰碑

およそ100年前のお話です。

御前崎では漁がさかんでしたが、漁をする場所からもどってくるのに時間がかかり、せっかくとった魚をくさらせてしまうことがありました。

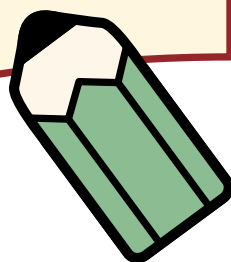
勝次郎は、船に発動機はつどうきをつければ船が速く進むことを知り、洋式動力船「駒形丸」をつくりました。駒形丸は、遠くへ漁に行っても、魚が新鮮しんせんなうちにもどってくることができました。

また、そのころ御前崎には電灯でんとうがなく、夜はランプの生活でした。相良に電灯がついたことを知った勝次郎は、御前崎にも電灯をつけることを決心しました。なるべくお金がかからないように、電線を銅線ではなく鉄線てつせんにすることを考えました。1916 (大正5) 年に南遠電気会社をつくりました。電灯がついて明るくなり、村の人たちはたいへん喜びました。

1917 (大正6) 年には、灯台にも電気が送られるようになりました。光のとどく距離きょりが1.5倍にのびて、海を進む船の安全が、より確かになりました。



洋式動力船



☆他にも、御前崎市のはってんにつくした人々や、日本や世界で活やくした人々について、調べてみましょう。



おのだきいつ  
**小野田喜逸 (御前崎)**  
 (1881~1965)  
ふじんしょうぼうだん 婦人消防団を結成した。



くりばやしざわいち  
**栗林澤一 (白羽)**  
 (1910~1991)  
さんりょうせき 三稜石を発見した。



さくらのぶたけ  
**佐倉信武 (佐倉)**  
 (1849~1887)  
 静岡に新聞社や学校をつくった。



しのだじさく  
**篠田治策 (池新田)**  
 (1872~1946)  
 教育や政治に力をつくした。



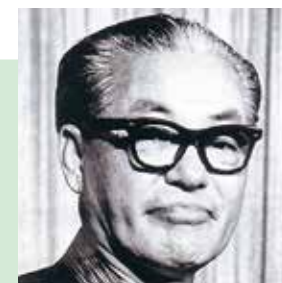
はぎわらさきち  
**萩原左吉 (比木)**  
 (1857~1940)  
 比木と池新田をつなげるトンネルをつくった。



まるおけんじ  
**丸尾謙二 (池新田)**  
 (1900~1972)  
 池新田高校の初代校長になった。



みうらたまき  
**三浦環 (朝比奈)**  
 (1884~1946)  
 オペラ歌手として活やくした。



みずのしげお  
**水野成夫 (佐倉)**  
 (1899~1972)  
さんけい 産経新聞社の社長として多くの仕事をした。



みやもとゆういちろう  
**宮本雄一郎 (朝比奈)**  
 (1877~1945)  
 お茶を世界に広めた。